

探訪 北の風景 50

旭浜トーチカ群 十勝管内大樹町

青木和弘

5月初旬、十勝管内大樹町の海岸、旭浜を訪れた。集落の庭にエゾヤマザクラが咲いていたが寒い日で、太平洋から吹き付ける風は強く、手袋なしでは凍えるほどだった。

旭浜漁港のそばから未舗装の道路を500メートルほど行くと海に出る道がある。そこを右折するとすぐ赤い鳥居と小さな祠がある。波打ち際までは50メートルほどだ。車を降りて玉砂利の混じる砂浜を眺めると、コンクリートを立方体に固めた構造物がすぐ先にあった。トーチカである。

トーチカとはロシア語で点のこと、点のように

配置した武装陣地だ。海岸段丘の草むらに隠れるように造られたが、荒波による侵食作用で土砂が流れ、地震による地滑りもあって向きや傾きも変わり砂浜に露出したのだ。波打ち際に埋まったものや、護岸工事や開発などで失われたものもあって、現在、同町で確認しているのは15基だという。

十勝には広尾、豊頃、浦幌の海岸にもある。旭浜漁港から歴舟川河口までの約2キロの間に8基あり、「旭浜トーチカ群」と呼ばれる。トーチカの間隔は、短いところで70メートル、長いところで400メートルある。入口は砂に埋まり、銃眼の小窓が不気味だ。コンクリートの厚さが50センチぐらいあるので、内部は2、3人で機銃を構えるのがやっとではないだろうか。

これらは、太平洋戦争末期の1944（昭和19）年5月から、アメリカ軍の本土上陸に備えて、大本営の命令で陸軍第七師団が「沿岸築城整備要領」に基づき設置した。同年12月までに約40基を造ったといわれる。大樹は、海岸付近まで深い海が続いているので、大型艦船を保有するアメリカ軍の上陸有力地点と想定されていたのだ。

トーチカの建設には地元住民も動員された。当初は鉄筋コンクリートで造る予定だったが、資材不足でコンクリートと木枠だけの施工になり、丸太を組み合わせた木製のトーチカもあったとい



入口の反対側に銃眼があった。制海権も制空権も失った日本は、なすすべもなく空爆を許している。迎え撃つこともできなかったトーチカは、そんなむなしさを語りかけているようにも思えた

う。海岸から500メートルほど内陸部の地中から、比較的大きなものが2008（平成20）年に発見されている。

これらのトーチカは、一度も使わずに済んだのだが、この地域も戦火に見舞われている。終戦1カ月前の1945年7月14日と15日、北海道は航空母艦13隻から飛び立ったアメリカ軍機、延べ3000機の空襲を受け、函館、室蘭、釧路、根室を中心に、死者2000人を超える被害を出している。

「北海道空襲」（菊地慶一著、北海道新聞社刊）によると、大樹には15日、戦闘機グラマンが4機飛来し、機銃掃射で民間人2人が死亡した。隣の広尾は前日の14日、松の木に登り敵機に手を振っ





旭浜漁港側から3番目のトーチカ。正面に見える入口が半分以上砂に埋もれている。入口は海と反対側にあったものが、長い年月で地面が浸食され、横向きに変わってしまったのだろうか



銃眼の奥の闇が不気味だ。ここから機銃を突きだして発砲する。敵の弾よけのため段々が付けられている

てしまった国民学校の3年生高野雅郎さん9歳が撃たれて即死した。たぶん、飛行機が大好きで、目を輝かせ、身を乗りだすように手を振ったのだろう。どさりと地面に落ちる姿まで目に浮かぶようだ。胸から入った銃弾は内臓をえぐって背骨を砕き、貫通して側にいた子どもたちの肉まではぎ取っていったという。高野少年が本州から疎開してきて1週間目のことだった。この空襲で、十勝管内では60人が死亡している。

トーチカや要塞などの戦争遺構を保存し、証言を記録して語り継ぐ活動があるが、自国の歴史を正しく見つめ、戦争の惨禍を二度と繰り返さないよう、後世に伝えることの重要性を改めて強く感じた旅になった。